

長崎県知事と漁業者らの面談が実現！

よみがえれ！有明海・国会通信

深刻な漁業被害が、現在進行形で発生していることを長崎県も認める

【長崎 asahi.com 2012年8月24日】

有明海で続く不漁を受け、国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門の開門を求めている県内の漁業者10人が23日、県庁を訪れ、中村法道知事と面談した。(中略) 中村知事によると、開門調査を国に命じた高裁判決が2010年12月に確定した後、開門を求める漁業者と面談するのは初めてという。

漁業者たちは「開門を敵視する姿勢からの転換」を求める要請文を知事から手渡し、干拓事業の着工以来、アサリやタイラギなどの漁業資源が壊滅的な打撃を受けていると主張した。その上で「開門調査が裁判で決定されたことを受け止め、(不漁の)原因調査をしてほしい」「早く開門に向けてかじを切ってほしい」などと訴えた。さらに、知事に現地視察と再度の面談を要請した。

中村知事は「開門に何が何でも反対という話ではない」としながらも、「今のまま開門されると(漁業や農業に)様々な問題があるから(国に)対応策を考えてくださいと言っている。しかし全然聞き入れずに前に進めようとしている」と説明。開門に反対している現状に理解を求めた。

面談後、中村知事は報道陣の取材に応じ、「改めて大変な状況の中で漁業者が苦勞していることを実感した」と話した。一方で「ただ、開門するかどうかは全く別の要素が含まれる。慎重に判断を求めていく必要がある」と話した。現地視察については「機会があれば検討する」と話した。

漁業者側は面談後に記者会見を開いた。小長井町漁協理事の松永秀則さんは「自分たちとあまりにも認識の違いがありすぎた」と話した。半面、「もつと話を聞きたいという意欲が知事にあった」と一定の評価も示した。瑞穂漁協組合長の石田徳春さんは「こういう話し合いを農業者も交えてできれば展望も開けると思う」と期待を寄せた。



よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

中村・長崎県知事 「現地視察を検討する」と約束

【西日本新聞 2012年8月24日】

国営諫早湾干拓事業(長崎県諫早市)の潮受け堤防排水門の開門を求める県内の漁業者10人が23日、県庁を訪れ、開門反対の中村法道知事と意見を交わした。常時開門を命じた福岡高裁判決が2010年12月に確定した後、知事が開門派漁業者と意見交換するのは初めて。

島原市の有明漁協の松本正明組合長は「調整池から排水される汚水で漁業被害が出ている」と主張。諫早市の小長井町漁協の松永秀則理事は「調整池に発生したアオコが原因で、堤防の近くで捕ったボラが臭くて食べられない。実害が出ていることを知ってほしい」と述べ、開門による調整池の水質浄化を訴えた。

中村知事は「漁業環境の厳しさは実感している。諫早だけでなくさまざまな原因を検討する必要がある」と応じ、農林水産省の環境影響評価(アセスメント)を踏まえ「開けられむしる漁業被害が出る」と反論した。

約40分間、互いの意見を主張するにとどまったが、中村知事は漁業者が求めた現地視察を「機会があれば検討したい」。漁業者は「今回を契機に農業者も含めた話し合いができれば問題解決に向け展望が開けてくる」と期待を寄せた。



今季も絶望か？ タイラギ主力漁場で姿を消す

【西日本新聞2012年7月25日】

有明海の高級二枚貝タイラギが、主力漁場の佐賀県太良町沖と福岡県大牟田市沖でほとんど見つからないことが佐賀県有明水産振興センターの6、7月の調査で分かった。近年の夏場は成貝が大量死亡し、今年はまだまった生息地区が確認できていない。記録的な九州豪雨による環境悪化の影響もあり今漁期(12月に解禁)は昨季以上に厳しい状況が予想される。(中略) センターの荒巻裕係長(42)は「稚貝が育っても死滅する恐れがある。主力漁場以外で生息しているかどうか、早急に調査を始めたい」と話す。